

## 林榮助君の死を悼む

工學博士 田 中 豊

大正十三年以來、日本橋梁株式會社專務取締役として活躍せられたる林榮助君は、本年五月病を得、爾後専ら靜養に努められたが、藥石効なく去る七月十三日遂に逝去せられた

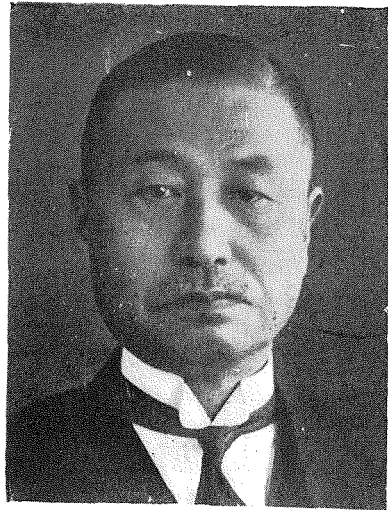
故林榮助君は明治四十年慶應義塾理財科を卒業後、北濱銀行名古屋支店長、藤田家顧問等を経て大正十三年以來専ら日本橋梁會社の經營に従事し、銳意社運の隆昇に盡力し、組織制度の改革、人事業務の刷新、機械設備の改善、優良品の安價供給、新販路の開拓等凡の方面に新境地を開き終に『日本橋梁』をして、今日の盛名を馳するに到らしめたのである。

特に昭和二年頃より産業能率研究に特別な興味を持ち、同社の經營は勿論大阪市各所の工場に出入し、盛に科學的經營法を主唱し其研究にかゝる著書、亦寡からず、昭和四年には大阪市産業能率研究會理事長に推舉せられ、昭和六年の紀元節には大阪府知事より産業能率研究に特別な功勞ありとして銀杯一箇を授けられた程である。

予が君と初めて相見えたのは大正十三年の春であつたが、爾來君が寢食を忘れて橋梁製作業務の向上改善に盡されたる努力は、正に本邦橋梁技術界の一異彩として衷心より敬謝せる所であつた。

何等私的關係のなき田中博士が口を極て林榮助氏の人物を推賞する所以は何處にあるか田中博士は日本の橋梁工學者としての第一人者である。此人が橋梁製作に關し日本全國に目を皿にして求めたものは何であつたか、それは一日に言へば眞劍なる業者であつた。

到る處の工場を視察して田中博士の満足した處は殆んど一ヶ所もなかつた。製作設備や工場の組織に就て到る處に缺點を見、不満を感じてゐた。多くのメーカーのうちには博士の意見を一種の皮肉の如く感ずるものさへあつた。



日本橋梁株式會社專務取締役  
故 林 榮 助 氏

然るに一夜君が訃音に接し、哀惜の情甚切なるものがある。茲に君が光輝ある遺業を追想し謹而君が冥福を祈る

### 故 林榮助氏略歴

明治八年七月岐阜縣加茂郡太田町に生る、明治四十年慶應義塾理財科を卒業す、此間日露戰役に從軍し處々に轉戦し從七位勳六等功五級に叙せらる、明治四十年大阪北濱銀行に入社、大正三年藤田家の顧問となる、大正十三年岩井商店社長岩井勝次郎氏の推薦に依り、日本橋梁株式會社の經營を委託せられ同社の專務取締役となる、昭和四年大阪市産業能率研究會理事長に推舉せられる、昭和六年七月十三日死去。

大正十二年の關東大震災後、故大田圓三氏と俱に大阪の日本橋梁會社を視察した田中博士は、技術家らしい皮肉交りの工場視察所感をピシク々と吐いた之に對し大概の者なら御無理御尤と受流す處であるが、同社の取締役林榮助君は胸中にヒンを響くものがあつて、眠氣が醒めた如く感じた。而して工場を視察した田中博士一行の跡をつけて飯も喰はず五時間も離れずに、不良ヶ所の意見を求めたのであつた。其根氣には田中博士一行も殆んど弱つたが、缺點だらけで工場の不整頓も甚しいので、何處を何うと言や二言に盡せるものでない、餘り林氏がクドク付